

天明6(1786)年12月、赤水が自筆した家訓が残っている。儒学思想、赤水自身の体験に基づく深い思いが窺える

登場する地域の名前や位置関係を、表紙や裏表紙の裏面の余白に図で記しているのです。

訪れたこともない中国の地理を描くなど普通は無理です。経書を読む中で疑問を抱き、勉強を積み重ねて得た力なのでしょう。結婚を経て、学者としての評判が高まってきた三十代には『論語』や『左氏春秋』の講義を頼まれて福島のいわきに遠征します。そうして宝暦元(一七五二)年、三十五歳の頃に儒学を大成。継母の威が亡くなったのも同じ頃でした。

学問は何のために修めるのか

ほどなく、赤水はある問題に突き当たります。当時、水戸城へ年貢を納めるため苦勞して山道を進むうちに迷い、崖から落ちて亡くなる人、怪我をする農民が多くいました。また、自分が講義に出かけた時、細い道に入り込んで危ない目にも遭ったようです。庶民は絵師たちが描いた大雑把な絵図に頼るしかありませんでした。

その頃赤水の心にはある考えが育っていました。学問は学問のためにするのではなく、人の役に

立つためにある——母たちの教えが生きていたのかもしれない。

三十五歳以降、様々な形で地図を描き、正確な作図に必要な天文学・地理学も学び始めます。水戸藩の修史局(光圀公が始めた『大日本史』編纂を担う)彰考館に入りし、天文学者・小池友賢に師事する他、図書係の立原蘭溪と漢詩の会で交流を深めます。その手引きで各藩の国絵図を借り、水戸城下で広げては、半紙を重ねて一枚一枚写し取っていました。

もちろんそれらを合わせても分らないところがたくさん出ます。そこで頼ったのが、道行く人の情報でした。赤水の家は、大きな街道の脇にありました。道行く旅人を招き入れては食事やお茶を振る舞い、歩いてきた道の様子を聞く。座右に貼った地図に誤りがあれば和紙を被せて修正しました。学友の松岡七賢人には各地を歩く山伏が二人いたため、それらにも声をかけて詳細な道を描いています。気の遠くなるような作業です。しかし聞き書きに留まらず、四十四歳の時に東奥(東北)を旅して松尾芭蕉の『奥の細道』に近い地域を歩いています。また五十一歳

の時、水戸藩磯原村の船がベトナムまで流され、中国船で帰ってきた船員を長崎の出島まで迎えに行き、中国人と漢詩で交流。漢学の高い教養と儒学者のネットワークが赤水を後押しし、世界を見る目、政治への目を開いていきました。

その中で緯度の概念への理解を深め、それを盛り込んだ『改製日本分里図』が完成したのは着手から十七年経った明和五年、五十二歳の時でした。これは、後に版を重ねる赤水図の原因にあたります。同年、功が認められ、農民でありながら武士と同じ扱いを受け郷士格になりました。

農民から藩主の侍講へ 駆け上がった赤水

順調に進んでいたかに見えますが、実は途中、学者生命の危機に陥っています。東奥遊歴から帰った際、水戸藩では、異学の禁、朱子学以外の学問を追い出す運動が激化していました。門閥からの嫉妬もあつたでしょう。儒学者の赤水にも讒言が飛んできました。

下手をすれば学問を続けるどころか、首を刎ねられる時代です。追い込まれた赤水は立原蘭溪を通

家訓

「それ考は徳の本なり。わが子孫よるしくこれを行ふべし。天の時地の利により、身を謹み用を節し、父母に事へてはよくその力を竭し、君に事へてはよくその身をいたし、朋友と交はりて言ひて信あり、広く衆を愛して仁に親づき、行ひて余力あらばすなはち以て文を學ぶ。夙に興き夜に寝ね、経を帯して耕し寸陰を惜しむ。これすなはち孝なり。不孝は五。その四肢を惰するは一なり。博奕好酒は二なり。貨財私妻を好むは三なり。耳目の欲するに従ふは四なり。勇を好み闘闘するは五なり。(中略)この語に事へず、専らひそかに利を貪り、色に溺るる者はわが子孫にあらざるなり。歎しめや」

仕した二年後、代表作『改正日本輿地路程全図』が誕生。原図完成から十一年後のことです。

特徴の一つは、一寸(約三mm)を十里(約四十km)とした縮尺です。土地の高低や道の曲がり具合による微差は、綱糸を道に沿って置き、その長さを測れば分かるようにしてありました。広げると八十一cm×百三十cmにもなる同図は、冒頭で触れたように翌年、折り畳み式で発行されて瞬く間に広まりました。少なくとも五版を重ね、模倣版や海賊版が多数出回った記

録が残っています。

しかし、これに満足せず、誤りが見つかればすぐ直していた事実には驚かされます。藩主に仕えながらさらに十一年をかけて第二版(寛政版)を七十五歳で出版。初版(安永版)にはなかった郡分けがなされ、船乗りが使いやすいよう港から港までの距離、汐路まで書き込まれているのです。一両で一年分の米が買える時代に、彩色された二版は一枚二十五両でした。が、吉田松陰の時代には三百八十文(数千円)に値下がりしていた点にも、普及の度合いが窺えます。赤水図の凡例に、こんな落款が捺されています。「千古一業——千百年万年、永遠に残る一大事業だ」というメッセージでしょう。

赤水は地図づくりを「人生の大事」として、さらに中国地図、世界地図など驚くような偉業を残しています。江戸時代の庶民に、日本が世界のどこに位置し、自分がいま日本のどこに立っているかを教えたのが長久保赤水なのです。

栄達も本懐にあらず 学問は人のために為す

農民から侍講に取り立てられた

じて彰考館の権威・名越南溪に見事な一筆を送り、難を逃れます。「程朱の学は、物に格り理を究む(格物致知)。治国小大遺すなし。博文約礼(広く学問して事の理を極めた上、礼を以てこれを締め括り実行すること)は、実に孔孟(孔子・孟子)の正宗なり。然りと雖も、物必ず長短あり。苟も其長を取れば、何の書か読むべからざらん」……私はあらゆる本に目を通し、その中の真理を学び取っている。それが孔孟の道であり、長所を取れば読むべきでない本があるだろうか。ここに私は、人間・長久保赤水の強さを見ます。

安永六(一七七七)年六十一歳の時、水戸藩六代藩主・徳川治保公の侍講として江戸の藩邸住まいを命じられます。農家出身として異例のことでした。そうして出



江戸周辺を拡大した赤水図原図。おびただしい修正痕がある。厳密な縮尺に加え、版を重ねるほど目印となる山河の絵も充実していく

色事を禁じ、警沢に走らず質素儉約を旨とせよ。寸陰を惜しんで学問をせよ……これを忠実に守らなものは我が子孫ではないと。少し息苦しく感じるかもしれませんが、赤水の根っこがここにあると私は思います。「地図の作成は余技(ノ趣味)として思い立つ」と彼は言いました。では本分は何だったか。やはり儒学、学問であり、地図はその実践だったのです。

享和元(一八〇一)年七月二十三日、学問の一業に生きた赤水は八十五年の生涯を閉じます。時は流れ明治四十四年、死後百十年の後に従四位の叙勲を受けました。

私が三代目会長を務める長久保赤水顕彰会では、赤水子孫をはじめ関係者の協力を得て、地図の原本や著作といった資料を約千点収集。うち六百九十三点が、二〇二〇年九月、国の重要文化財指定を受けられたことは光栄の極みです。長久保赤水の名が各分野随一の研究者の皆様目に触れ、地元の偉人としてのみならず、日本が世界に誇る先人として認められる日まで、弛まぬ顕彰活動、私の人生の大事に力を尽くす覚悟です。